
カテキョ

来城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カテキヨ

【Nコード】

N7471X

【作者名】

来城

【あらすじ】

お隣に住んでいたお兄ちゃんは、今は私のカテキヨで、私の大好きな人だったりする。

シャイなお兄ちゃんとシャイな私のちよっぴりじれたい恋愛事情。

携帯サイトからのお引越しです。

Lesson 1

午後8時、5分前。

時計で確認して、深呼吸を1つ。

「よし」

私は部屋を出て、玄関に向かう。

階段を降りきったところで、ピーンポーンとインターホンが鳴った。

相変わらず、時間ぴったり。

「はぁーい!」

ガチャリ。ドアを開けると、そこにはカテキョの先生。もとい、小さい頃から知っている4つ年上のお隣のお兄ちゃん。さらにもとい、私の大好きな人が立っている。

2

「こんばんはー、お兄ちゃん」

「こんばんは、亜美ちゃん」

お兄ちゃんは柔らかく微笑む。

もうほんとカワイイ。なんなんでしょう、男性にあるまじきこの可愛さは。この笑顔が見れるなら勉強だって頑張りますって話だ。

週一回、午後8時から午後10時までの2時間のカテキヨをお兄ちゃんにお願いしてから、もう三ヶ月が経つ。

それなのに、いまだに気持ち伝えられずにいる。

このまま、ずっと先生と生徒のままだったらどうしよう……なんて、不安になったりもする今日この頃。

どげんかせんといかん、と元宮崎県知事の真似して自分に言い聞かせても、なかなか難しくくて。

「そ、それじゃ、はじめようか」

「はい」

「今日は数学だったね」

お兄ちゃんは、部屋の中央にあるローテーブルを挟んだ斜め右に座ると、テキストを開く。

本当は数字も見たくないくらい大っ嫌いな数学だけど

「よし、がんばるぞー」

「いつも意欲的だね」

「え、だって」

「ん？」

「……教えてくれるのが、お兄ちゃんだから」

途端、お兄ちゃんの顔が赤くなる。

この反応、どうなんだろう。いい雰囲気ってやつなのかな？

でも、お兄ちゃんってすぐ顔赤くなるし。

そこがまたいいんだけど。私のこと、どう思ってるのかわからないのが困りもの。

「じゃ、じゃあ、今日はこのページから」

あーあ、スルーされちゃった。仕方ない。本当に頑張ろう、数学。私はシャーペンを手にとって、お兄ちゃんが開いたページに視線を落とした。

カリカリ。カリカリ　暫くは、集中して問題を解いていたけど、分からない問題にあたって、シャーペンが止まる。

顔を上げると、お兄ちゃんは頬杖をつけてボーっとしていた。

昔から、たまにこういうことがある。こういう時のお兄ちゃんは、軽く呼んだくらいじゃ気づいてくれない。

「お兄ちゃん」

「……」

「お兄ちゃん？」

「……」

やっぱりだ。私は身を乗り出して、お兄ちゃんに顔を近づける。さすがにこれなら気づくでしょう。

「……お兄ちゃん？」

「ん？　って、わあっ！」

いきなり私の顔がアップになったからか、お兄ちゃんは飛び上がるほど驚いた。

「なんか失礼ー」

「ご、ごめん。急だったからびっくりして」

「ちゃんと呼んだよ」

「……わ、分かった。分かったから、とりあえず、離れて」

「どうしてえ？」

さらに近づいてみる。

お兄ちゃんは、ほとほと困り果てたように落ち着きなくあちこちに視線をさまよわせている。

でも、たまに私のほうを見て　　っていつより、私の服？　なん
で？

不思議に思っつて、お兄ちゃんの視線を辿ると、ボタンがいくつか開いたシャツ。

ま、まさか　　私はあることに思い当たる。

もしかして、今までも？

私は、いつも制服で授業を受けている。だから、自然と短いスカ
ートやら、胸元の開いたシャツでお兄ちゃんの前にいるわけで。

ちょ、ちょっと待って。私、そこまでは考えてなかった。どうし
よう、恥ずかしい。

「…………お兄ちゃんのエッチ」

「ちちちちちがっ！！　違っ違っ！　見てない！！　なんにも
見てないっ！！」

「嘘だあ…………」

「うっ、嘘じゃないよ！！！！」

必死すぎて逆に怪しいよ、お兄ちゃん。カマかけてみよう。

「…………恥ずかしいな、黒のブラ見られたなんて」

「え？　白じゃなか　　あ！！」

「やっぱり見てたんだあ！！」

「…………」

お兄ちゃんのバカ。こんな簡単な手に引つかかるんだから。

「ご、ごめん。ごめんね？」

お兄ちゃんは本当に申し訳なさそうにぺこぺこ頭を下げる。

そこまで謝らなくても、いいんだけどな。

そもそもちゃんとボタン閉めてなかった私が悪いんだし。しかも、その状態で前屈みになったのが悪いんだし。お兄ちゃんが見ちゃったのは、不可抗力ってヤツだもん。

「あ、亜美ちゃん？」

私が黙ったままでいたからか、お兄ちゃんは、うかがうように弱気な視線を私に向ける。

しょうがない。

「……………もういいよ」

「え？」

「怒ってないから」

「……………ホント？」

「うん。でも……………」

「でも？」

「もう見えないように、ボタン留めて…………？」

これは嘘ついたことへのお仕置き。

お兄ちゃんが口をあけたまま固まる。次の瞬間には、林檎みたいに顔が真っ赤か。

「そしたら、許してあげる」

そう言って、お兄ちゃんの手を胸元のボタンへ引き寄せる。
しばらく迷った後、お兄ちゃんは意を決したように、震える手で、
1つずつ、ゆっくりとボタンを留めてく。

う、ちょっとやりすぎたかも……私の方が恥ずかしいよ、これ。

「……お、お兄ちゃん」

もういいよ、と言おうと思って呼びかけると、お兄ちゃんが顔を
上げる。

そうすると、思ったたよりも顔が近くて。あと少し動いたら唇と
唇がくっついちゃいそう。

そんなことを考えていると、不意にお兄ちゃんが私の体を引つ張
って

「えっ?」

その勢いで私とお兄ちゃんの唇が合わさろうとした。
その瞬間。ノックの音がした。

「うわっ!」

「きやあっ!?!」

突然のノックにびっくりしたのか、お兄ちゃんが私を突き飛ばす。
ちよっとひどい……

「あらあら、またじゃれ合ってたの。あんまり亮君を困らせちゃダ
メよ、亜美」

タイミングの悪いノックをした張本人、お母さんがケラケラ笑いながら言う。

昔からよく知っているお兄ちゃんが、まさかたった今私とキスしようとしてたなんて考えもしないんだろう。

「はい、亮君、お茶どうぞ」

「あつ、ありがとうございます……」

よっぽど喉が渴いていたのか、お兄ちゃんは出されたお茶を一気に飲み干す。

「あらあ、いい飲みっぷりねえ」

「は、あ、いや、喉渴いていたので、すみません」

「そっでしようねえ。ホントこの子になにか教えるのって大変なのよねえ」

「い、いえ、そっいうわけじゃ……」

「ちよつと、お母さん！ お茶出したらさっさと出てってよ。勉強できないでしょ」

なんだかこのまま居座りそうな気配をみせるお母さんに、そう言う。

「はいはい、それじゃ、亮君、よろしくね」

「あ、はい」

「亜美、しっかり勉強するのよ」

「分かってる」

余計な言葉を付け加えてお母さんは部屋から出て行く。

はあ……さっきの続き、なんてムリだよねえ。タイミング悪いんだから、お母さんったら。

「……それじゃ、勉強しよっか、お兄ちゃん」

仕方なく、私は机の上のテキストに視線を落とす。

「……亜美ちゃん」

「んー、なに？」

「さ、さっきはその、ごめんね」

キス、しようとしたことに対してだろうか？ それとも、ノックにびっくりして思わず私を突き飛ばしたこと？
どっちにしても、謝られるのは、なんかヤダ。

「……謝っちゃヤダ」

「え？」

「……今度は、続き……期待してるね」

「亜美ちゃん……」

「今度は、突き飛ばしちゃだよ」

「う、うん」

お互い、顔を真っ赤にさせて。自分達の行動を思い出し、また照れる。

先生と生徒。今日は、その関係から少し進んだのかも。

私たちが恋人同士になれる日は来るのかな？ ね、お兄ちゃん？

Lesson 2

夏休みが始まった。といっても、午前中は補習だったり部活だったり、午後は友達と遊んだり、色々忙しい。

でも、お兄ちゃんが来る日だけは、ちゃんと家にいるようにしていた。

今日だってそう。

それなのに、夏の暑さと遊び回っていたツケに負けて、私は襲ってくる眠気に勝てず、ベッドに突っ伏してしまった。

もちろん、お兄ちゃんが来るまでには、シャキッと起きているつもりだったのだけれど。

ふと髪を撫でられたような感覚に薄く目を開けると、お兄ちゃんがすごく優しい顔で私の髪に指を滑らせていて。びっくりして、思わず寝た振りをしてしまった。

お兄ちゃんは、私が目覚めたことに気づいていないのか「……よく寝てるなあ」と、しみじみ言いながら、私の目にかかった前髪を払ってくれた。

その手が、流れるように私の頬にそっと触れ、そこでピタリと止まる。

目を閉じていても、お兄ちゃんの視線を感じる。なんだかドキドキしてきた。

お兄ちゃんが、今、なにを考えているのかはわからない。

でも、私は少しだけ期待してしまっ。

二人っきりの部屋。

前、出来なかったキス。お兄ちゃん、してくれないかなって。

頭の中に浮かんできたその光景は、どんどんどんリアルさを
持つていく。自然と頬が熱くなるのを感じる。私の頬に手を触れて
いるお兄ちゃんに、その熱が伝わっちゃうんじゃないかなって不安
になるくらい。

そんなことを考えていると「……亜美ちゃん」不意に名前を呼ば
れた。

一瞬、寝た振りがばれたのかと思ったけれど、違った。

お兄ちゃんの吐息が近くなって チュツと額に落ちてくる唇。

してくれた！ 唇じゃないけど、してくれた！！

嬉しくて、嬉しくて。

「……お兄ちゃん」

無意識のうちに言葉が零れた。

「え？」

お兄ちゃんがぎくりとした声を出す。

このタイミングで呼んでおいて、寝た振りを続けるのはちょっと
無理があると思って、もう目を開けていた私とお兄ちゃんの視線が
合わせる。

「……………」
「……………」

しばらくの沈黙。

私の頬はピンク色のままで、逆にお兄ちゃんの顔色は青く、青白くなつていく。

「あっ、ああ亜美ちゃん!!! 起きてたの!?!」
「ご、ごめんなさい!?!」

ベッドからガバツと起き上がって頭を下げる。

お兄ちゃんの顔色は、青白くから真っ赤に変わっていた。

「あ、あのね、さ、最初は本当に寝てたの! ホントだよ」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

「ご、ごめんなさい」
「や、ご、ごっちこそなんて言ったらいいのか……………」
「……………」

お互い、真っ赤になって謝って。勉強する時間なのに、謝る時間みたいで。

放っておくと、ずっと謝り続けちゃいそう。私はとにかくとして、お兄ちゃんが。

「お、お兄ちゃん、そろそろ勉強しよ勉強!?!」

だから、そう助け舟を出す。

「あっ、そ、そうだね。そうそう、勉強勉強……………」
「えっと、今日は2

00ページから」

「お兄ちゃん、これ180ページしかないんだけど」

「……あ」

動揺して、混乱しているお兄ちゃん。そんなお兄ちゃんが可愛く思えて、私の顔はだらしなくほころんでしまった。

なんとかお兄ちゃんを落ち着かせて、勉強を開始したのは、それから数分後。

ただ、なんていうか、寝起きっていうのもあって、いまいちはおどらない。

「……大丈夫？ まだ眠たそうだけど」

見かねたのか、お兄ちゃんが心配そうに問うてくる。正直に答えるべきかどうか迷う。

とりあえず「あは」と笑って誤魔化すと、お兄ちゃんは「今日は、ここまでにしようか？」と言った。

「え？」

「頭が働かない時は、ムリしないで休んだほうがいいからね」

「……うーん。そしたら、お兄ちゃんは帰っちゃうの？」

もしも、そうならお兄ちゃんの言葉にノーを言わなきゃいけない。だって、まだ家庭教師の時間は1時間半も残ってるんだから。

「亜美ちゃんが眠くて死にそうなら帰るけど」

「だ、大丈夫だよ。私、眠るよりもお兄ちゃんと話したい」

勢いに任せて言ってしまった。

お兄ちゃんの顔がまた赤くなる。多分、私も。

「……ま、間違い」

「え？」

「今の間違い。お兄ちゃんの話が聞きたい。こっちにする」

最近のお兄ちゃんのこと聞けるし。

「俺の話？ ……そう言われても、なに話せばいいかな」

お兄ちゃんは少し困ったように頭をかく。

「えっとねー、じゃあ、私が質問していい？」

「いいよ、答えられる範囲なら」

「うん」

頷いたあと、えへへと笑う。その顔を見て、お兄ちゃんも笑う。すごくいい感じの空気。

さて、なにを聞こうかな？

隣のお家に行けば会えた昔と違って、一人暮らしをはじめた今のお兄ちゃんのことを、私はあんまり知らない。通っている大学は知ってるけど、どんな生活を送っているのかは分からない。

「うーんとねえ、お兄ちゃんは大学でどんなこと勉強してるの？」

「先生になる勉強だよ」

「へー、お兄ちゃん、学校の先生になりたいの？」

「うん」

「いいなあ、お兄ちゃんの生徒になる子たち」

「なに言ってるの？ 亜美ちゃんは、俺の一番最初の生徒なのに」

サラリと笑って言われた言葉にドキツとする。

お兄ちゃんは、私のドキドキにまったく気づいた風もない。
たまーにこつこつドキッとすることを自覚なしで言うんだから……

「……そ、そつかあ。そういわれたら、私、お兄ちゃんの生徒だよ
ね」

「うん」

「でも、やっぱり学校の先生だった方が嬉しいかなあ」

「え、なんで？」

「だって、そしたら、毎日会えるし。担任の先生、お兄ちゃんだっ
たらよかつたなあと思って」

「でも、それだと、亜美ちゃんばかり鼻^{ひじき}戻して、他の生徒とか親
御さんたちに怒られちゃいそうだよ」

ま、またそついうことをサラツと言っただから。

「そつかあ」って気の利かない返事しか出来なくなる。

なんかさつきからペースがつかめない。少し落ち着くために深呼吸
吸して。

お兄ちゃんは質問されることが楽しくなってきたのか「他には聞
きたいことないの？」なんて、のんきに聞いてくる。

「あ、あるよ。えっと、お兄ちゃん、今、どこに住んでるの？」

「結構、近くだよ。こっから電車で2つ」と」

そつ言っつて、お兄ちゃんは聞き覚えのある駅名を教えてください。

「本当に近いね。昔みたいに遊びに行っちゃおうかな……なーんて
ね」

言ってる途中でお兄ちゃんの表情が硬くなったから、冗談のフリ
をして誤魔化した。

ショックで顔が引きつるのが自分でも分かる。気づかれないように無理矢理笑ってみせると、お兄ちゃんは「あ、えっと、ダメってワケじゃないんだけど」と、慌てたように言った。

「ホントに？」

「う、うん。ただ狭いよ」

「平気！」

「そ、そっか。じゃあ、亜美ちゃんが暇で、俺が家にいる時にでもおいでよ。電話くれたら大丈夫だから」

照れくさそうにポリポリと頬をかくお兄ちゃん。

お兄ちゃんがすごく頑張って言ってくれたのが分かる。

なんだか、嬉しすぎて、少しの間、言葉が出てこなかった。

そんなこんなで話をしていると、1時間半なんてあっという間。いつのまにか時計の針は10を指していた。

お兄ちゃんを玄関で迎えるのが恒例なら帰りは門の前まで見送るのも恒例。

「それじゃ、また来週」

「うん。バイバイ、お兄ちゃん」

手を振ってお兄ちゃんの背中を見送る。いつもと同じ光景。

でも、なんかいつもと違って 来週まで我慢できそうにない。

「お兄ちゃん！」

後姿を呼び止める。お兄ちゃんが不思議そうに振り返った。

「あ、あの、明日ってなにか用事ある？」

「明日は……多分、なにもないけど」

困惑した顔でお兄ちゃんが答える。

「あのね、私……来週まで待てそうにないから、明日もおにいちゃんに会いたい……です」

私の言葉にお兄ちゃんは、ぼかんと口を開けて固まってしまった。

「……ダメ？」

不安になって問うと、お兄ちゃんは「ダ、ダメじゃないよ」と、首を何度も勢いよく横に振る。

「じゃ、じゃあ、明日、駅に着いたら電話するね」

今度は首を何度も勢いよく縦に振る。

明日、お兄ちゃんの首が筋肉痛にならないかちょっと心配。

「そ、それじゃ、また……明日」

「うん、おやすみなさい」

改めて、お別れの挨拶をして。

いつもなら、これから一週間我慢しなきゃいけないけど、明日にはまた会える。今日はいい夢が見れそう。

「……えへへ」

お兄ちゃんと約束した次の日。私は、にやける顔をとめることができずにいた。

今までは、週に一度しか会えなくて、それもたったの2時間。そんなの、少なすぎると思っていた。それが昨日の今日で、またお兄ちゃんに会えるのだ。にやけずにはいられない。

「ふふ……」

ああ、ダメだ。

今はめちやくちやシリアスな古文の補習中。お兄ちゃんが教えてくれる教科じゃないから、ちゃんと聞いておかないと、ついていけなくなる。

なのに、にやける顔はやっぱり止められなくて。だって、学校が終わったらお兄ちゃんに会えるんだもん。そんなつちやっても、仕方ないよね。

「……神田あ、随分幸せそうだな」

「はいっ、そりやあもう!!!」

「そうかそうか。そんなに古文が好きか。じゃあ、ここを訳してもらおうか」

「うえ？」

ほとんど上の空で聞いていたせいで、結局、上手く訳せなくて怒られた。

にやけすぎるのも考えものかもしれない。
少し反省して、それからは顔が緩みそうになるのをどうにか抑えた。

そんな古文の補習が終わるなり、隣の席の奈津子が呆れたような顔で「……亜美さあ、今日、超キモイんだけどなんかあった？」と声をかけてきた。

「キモイ？」

「にやけすぎてキモイ」

「ひどーい」

そうは言っても、にやける頬は止まらない。何を言われても嬉しいのだ。

「マジ、あんた、ヤバイ薬きめてない？」

「きめてない。そうじゃなくて、今日はね……ふふふ」

「思い出し笑いとかマジキモイからやめて」

「なに言われても今日は怒らないよー」

「……なに？ なにがあるの？」

「よくぞ聞いてくれました！ 今日はね、お兄ちゃんの家遊びに行くんだあ」

「お兄ちゃん？」

奈津子が少し首を傾げる。

「亜美、お兄ちゃんなんていたっけ？」

「え？ あ、違うよ。お隣に住んでたお兄ちゃん。今は一人暮らしなんだけど、家庭教師に来てもらってるの」

「へえ〜。どんな人？ かつこいいいの？」

「んー、かつこかわいい感じで超優しいの」

「年は？」

「4つ上」

「いいじゃん、年上。で、付き合ってるわけ？」

うつ……これはちょっと嫌な質問。

「……ま、ただだけど」

思わず口ごもると、奈津子は「なーんだ」と、拍子抜けしたように言った。

「で、でも、今日は進展させるつもりだもん」

「へえ、ってことは、一気に2人で朝を迎えちゃうとか？」

奈津子がからかうような笑みを口元に浮かべて言う。

ふ、二人で朝！？　そ、それって　頬がカツと熱くなるのを感じる。

「そ、そこまでの進展は考えてないよっ！」

「でもさ、亜美にその気はなくても、相手がどうかは分かんないよ」

「」

「……分かるよ。お兄ちゃんにもその気はないと思う、多分」

「どうして？」

「どうしても」

キスでさえほっぺ止まりの『超』がつくほどシャイでウブなお兄ちゃんのことだ。多分じゃなくて絶対。

もうちょっとと行動に移してくれたらなーって思う気持ちもある。

でも、そんなところも可愛いつて言ったら、それまでなんだけど。

「まあ、いいじゃない。とにかく、私は今ハッピーなんだから」

「そりゃ、よかったね。でも、次はにやけない方がいいよ？」

「……分かつてるよう」

さっきみたいににやけすぎて当てられるのは御免だ。

私は頬をペチペチ叩いて、にやける頬を抑えるように努めた。

髪型よし。制服のボタンよし。香り、よし。顔、いつでもよし。
なんてね。

駅のトイレで自分の姿を確認後、お兄ちゃんに、今、駅にいることを電話で伝える。

「すぐ迎えに行くよ」と言ったお兄ちゃんは本当に言葉どおり、すぐに来てくれた。

「お待たせ」

「全然待ってないよー」

「そ、そっか。じゃあ、いこうか」

「うん」

二人並んで歩く。なんだか緊張する。これからお兄ちゃんの部屋に行こうとしているのだから、緊張するのは当然だけど。奈津子に変なこと言われたせいで余計に意識しちゃう。

そんなことを考えているうちに、お兄ちゃんの住むアパートに到

着した。

「汚いところだけど」

「お、お邪魔しまあす……」

お兄ちゃんと会うのは、いつも私の部屋。それが場所を変えたただけで、こんなに変な感じになるんだろうか。ドキドキしすぎて死んじゃいそうだ。

「今、飲み物用意するから、そこ座ってて」

「う、うん」

言われたとおりにクッションに腰を下ろす。

自分自身を落ち着かせるために、お兄ちゃんの部屋チエック開始。

なにがあるかなあ？ って、チエックするほど物がない。本当に生活必需品しか置いていないみたい。これぞシンプルイズベストって感じた。お兄ちゃんらしいといえば、らしいかな。なんて、ある意味、感心していると「はい、どうぞ」と、お兄ちゃんが私の前に淹れたての珈琲を置いてくれた。

ちゃんとミルクと砂糖が二つずつついている。私の好み、把握されまくってる。

「ありがとうー」

なんとなく気恥ずかしくて俯き加減でお礼を言う。

お兄ちゃんは何処に座ろうか少し迷ったような素振りを見せ、やがて、ベッドに腰掛けた。

「じゃ、なにしょっか？」

「え？ えーつとねえ」

元々、お兄ちゃんに逢いたくて家に来ただけだから、特に部屋で何かしようという目的もない。

かといって、ここで勉強するっていうのも、どうだかって感じだし。いや、教えてほしいことは一杯あるけど。それは次の家庭教師の時間で間に合うし。どうせなら、2人っきりの時間を大事にした
い。

考えて考えて、私はいいことを閃いた。時刻もちょうどいい時間。

「ねえ、お兄ちゃん、もう夜ご飯食べた？」

「いや、まだだけど」

「じゃあじゃあ……私が作ってあげよつか？」

「亜美ちゃんが？」

「うん」

「でも、家で食べるんじゃないの？」

「そうだけど、お兄ちゃん分だけ作るっかなあって？」

「い、いいの？」

「うん！！」

「……じゃあ、お願いしようかな」

「任せて！」

はりきって腕まくりなんか試してみる。

綺麗に手も洗って、料理する気は満々だ。

……さて、なに作るう？

「冷蔵庫見ていい？」

「いいよ」

冷蔵庫を覗いてみる。

中身、玉子とタマネギだけってビツミョー。

冷凍庫も覗いてみる。冷凍庫には、氷しか置いてなかった。

こんなんでいいのか、大学生！？　こんなに何もなかったら栄養が足りないじゃん。

お兄ちゃんの体が、心配になってくる。

「お兄ちゃんって、いつつも何食べてるの？」

「えーっと……ラーメンとかコンビニ弁当とか、あとは、友達の違い入れ」

「……」

「……」

「とにかく今日はあ、卵あるから愛情たっぷりオムライス！　ケチヤップは、あるよね？」

「あるある、大丈夫」

食材はないのに、ケチヤップの他、やたらと出て来る調味料。

調味料を揃えるくらいなら、食材にもう少し気を回したらいいのに、と思っただけど、口に出さない事にする。それに、お兄ちゃんが料理しないなら私が料理してあげればいいんだし。

頭の中では、エプロンをした自分と料理が出来上がるのを待っているお兄ちゃんの姿。まるで新婚さんだ。

私がそんな想像を膨らませている間にお兄ちゃんはどうと「じゃ、俺は米研ぐね」と、さっさと調理を始めてしまう。

「わ、私が研ぐよ」

「いいっていいって、これくらい」

「そう？　じゃ、お願いします」
「はい、お願いされます」

正直、お米って炊き上がったところしか知らない。

とにかく、水洗いしたらいいんだと思っていたけど、お兄ちゃんがしているのを見ると、それはちょっと間違った認識だったのかもしれない。

ジャーと水出して、ある程度溜まったら、水を止めて手でジャコジャコ掻き回す。

水の色が白くなってきたら、釜を傾けて水を流す。

今後のために覚えておこ。

また料理する機会があったら、今度はお兄ちゃんには座って待ってて欲しいしね。

それにしても、こうしてお台所で隣に並んで料理をしていると私は見るだけだけど、やっぱり新婚さんって感じていいなあ。

「ね、お兄ちゃん」

「んー？」

「なんかさ、私たち、ちょっと新婚さんっぽくない？」

「えー!？」

よっぽど驚いたのか、お兄ちゃんは手から釜を落っこしそうになった。すんでのところでキャッチしたから大丈夫だったけど。

「そんなに驚かなくてもいいのに」

「いや、だって……」

「嫌だった？」

「そうじゃなくて……ちょっとそう思ってたから、俺も」

お兄ちゃんは、私から視線を逸らしほそぼそとそう言う。
言った人がそこまで照れてちゃ、聞いている人はもっと照れちゃう。
なんだか心がくすぐつたい。

「…………お兄ちゃん」

好き。大好き。ウブなお兄ちゃんが、超好き。もう気持ちがあま
く過ぎて抑え切れないよ。

告白するなら。

告白されるなら。

今かも、しれない。

「「あ、あの」「

二人同時に、言葉を発したその時だった。インターホンも押さず、
ノックもなしに誰かが部屋に入ってきたのは

「どうもー、夜ご飯のおすそわけにきましたよー！」

スタイルよくて、綺麗で、なんていうか、一言で表すと 大人
の女性。

突然、現れたこの美女は一体、何者!?

「菊池さん!?!」

お兄ちゃんが驚いたように言う。

菊池さん? だから、何者なの?

くいくいとお兄ちゃんの袖を引っ張って小声で「誰？」と問うと「大学の友達」と、返事が返ってきた。慌てた様子もない。

言葉どおりに受け取っていいんだろうか。うーん。

「……あれ？ お客さんだった？」

菊池さんはお兄ちゃんの隣にいる私に気づくと、困ったような微笑を浮かべた。

「あー、うん。実家の隣に住んでる子。今、家庭教師やってるんだ。神田亜美ちゃん」

「……あ、どうも初めまして、菊池陽子です」

「は、初めまして、神田亜美です」

ペコリと頭を下げて、様子を窺う。

菊池さんは私とお兄ちゃんを交互に見やり、なにやら悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「んーんーんー、もしかして、私、恋人たちのスイートタイムに入ってきたお邪魔虫ってやつ？」

「い、いきなりなに言ってるんだよ」

「いいのいいの。そんな顔赤くして否定しなくたって」

じゃれあうような言い争いをはじめ、お兄ちゃんと菊池さん。菊池さんと話しているお兄ちゃんは、いつも私が見てるお兄ちゃんとはまた違って見える。

なんだろ。なんかモヤモヤ。

っていつか、スタイルいいし、顔キレイだし、大人だし、普通に考えて、勝てる要素が見当たらない。

お兄ちゃんは、本当は菊池さんみたいな大人の女性が好きなんだろうか。だとしたら、今の自分は、全然、お兄ちゃんの好みと違う気がする。

……これは、ピンチかもしれない。ウカウカしてたら、今、目の前にいる人にお兄ちゃんを取られてしまうかも。

「お兄ちゃん！」

「はっ、はい!？」

「……私、今日は帰るね」

「えっ!？ ちょ、ちよつと亜美ちゃん？」

「でも、期待してて」

「……な、なにを？」

「今日明日で大人の女性にはなれないと思うけど、私、頑張るから！」

そう宣言して、お兄ちゃんの部屋を出る。

全く状況がつかめていないお兄ちゃんはすぐに追いかけてきてくれたけど、私は階段を駆け降りて、降り終わった所でお兄ちゃんを振り返った。

「またね、お兄ちゃん」

手を振ってまた走り出す。

お兄ちゃんは呆気にとられたような顔をしていた。

「このあと、お兄ちゃんが……オムライスは？」と、呟いたのは、
私のあずかり知らぬ話。

Lesson 4

お兄ちゃんからデートに誘われた。

いつもの時間。私が問題を解いている間中、お兄ちゃんは頼杖を付き、どこか不機嫌そう。時折、大きく溜息までして。問題を解くのが遅すぎて、イライラさせているのかもしれない私は申し訳なくなつた。

「…………ご、ごめんね、遅くて」

「え？」

「私になかなか出来ないから、怒ってるんだよね」

「…………ち、違うよ。そうじゃなくて。ちよつと考え事っていうか」

お兄ちゃんはそこで言葉を区切り、ポケットから勢いよくなにかを取り出した。

バンと机の上に置かれたそれは、映画のチケットで。

「こ、これ貰いものなんだけど…………よかつたら一緒に見に行かないかなって」

「え…………？」

「い、嫌だつたらいいんだ。全然」

「や、やじゃないよ」

「ほんと？」

「うん」

「あー、よかつた」

ホツとしたように笑うお兄ちゃんが、愛しい。これってデートだよね？

それから勉強はそっこのけ。待ち合わせ場所と日時を決めることに一杯になってしまった。

二人して舞い上がってしまった結果、お兄ちゃんは私にチケットを渡すのを忘れて帰ってしまい、私もチケットのことをすっかり忘れていた。

後でそのことに気づいたけど、当日受け取っても問題はないだろうと、あまり気にしないことにした。

だから、私は当日まで知らなかった。お兄ちゃんが誘ってくれた映画が、今一番人気の、ホラー映画だったなんて。

そして、約束の日。夏休み中ということもあり、映画館の前にはたくさんの人。

ここでの待ち合わせは失敗だったかも　私はキヨロキヨロとお兄ちゃんの姿を探す。

お兄ちゃんが超奇抜な服を着てくれてたら、すぐに分かるんだけど……普段の服装から考えたら、そんなのありえないなあ。

想像したらちよつと笑えた。

ヤバイヤバイ。一人で笑う変な子になってる。

私は顔を戻して、時計に目をやる。

約束の時間より10分前。

早く来すぎちゃったかな。

突っ立っているのも疲れるので後ろの柱に寄りかかる。

「亜美ちゃん！」

程なくして、お兄ちゃんがやってきた。時間ぴったりだ。

「ごめんね、遅くなって」

小走りで駆け寄ってきたお兄ちゃんは、開口一番にそう言った。

「時間ぴったりだよ」

「でも、待たせちゃったみたいだから」

「いいのいいの。待つのもデートのうちだし」

「デ、デート？」

聞き流してくれればいいのにご丁寧に反応してくれるお兄ちゃん。デートでいいじゃん、バカ。

「違うの？」

「え……あ、ち、違わない、かな」

よく出来ました。

私は、ニッコリ笑ってお兄ちゃんの手を握る。

大丈夫、この人混みだもん。赤くなってる私の頬なんて誰も気にしない、はず。

私はお兄ちゃんの手を引っ張って、映画館の中へ向かう。

「あ、亜美ちゃん、入り口そっちじゃないよ」

「え？ だって、これ見るんじゃないの？」

私が入ろうとしたのは、泣けると評判の恋愛映画。でも、お兄ちゃんがバッグから取り出したチケットは、怖くて泣けると評判のホラー映画のものだった。

こんな機会がなければ見ようとも思わない映画。出来れば、こんな機会つくりたくなかった。

「……こ、これ見るの？」

「菊池さんが福引かなんかで当てただけどさ、ホラーダメだからつてくれたんだよね。俺、これ見たかったらラッキー」

「そ、そうなんだ……」

勝手にライバル視してる菊池さんからのチケットっていうのもあれだけど、これってなにかの嫌がらせ？

まだ映画も見てないのに泣きそうになってくる。

鈍感なお兄ちゃんはワクワクした様子で「亜美ちゃん、早く」と足取りの重くなった私を急かす。

「……お兄ちゃんって、子供みたい」

呟いて私は、大嫌いなホラー映画を上映する会場へ向かった。

映画が始まってから、数十分。

嫌な予感のするシーンではギョッと目を閉じて、なるべく見ない

ようにしているけれど、耳から入ってくる悲鳴や効果音だけはどうにもならない。

変に耳押さえたら、お兄ちゃんに気づかれちゃうし。そんなわけで、私は既に限界を感じていた。

「……亜美ちゃん」

「……え？ な、なに？」

急に小声で話しかけられて、そつと目を開ける。

「大丈夫？」

「な、何が？」

「もしかして、ホラーダメだったんじゃない？」

「そそつ、そんなことな　キヤーツ！」

言い当てられて、思い切り目を開けてしまったのが失敗だった。目を思い切り開けた所に見えたのは、えぐい死体。思わず、お兄ちゃんの腕へと抱きつく。

「……で、出ようか？　あんまり面白くないし」

その言葉に、ふるふると首を横に振る。

だって、面白くないって、絶対、ウソだし。

「そんな、無理して見なくても……俺が悪いんだし。ね、意地はらないで出よ？」

「……意地はつてないもん。それに、お兄ちゃん悪くない」

「亜美ちゃん……」

「だって、この映画超見たかったんでしょ？　だったら、私も見る。お兄ちゃんが見たい映画なら、一緒に見たいもん」

困ったようなお兄ちゃんの声にかぶせて言った。
お兄ちゃんは少し押し黙り、不意に私の頭を抱え込むように抱き
寄せた。

「……こうしてたら、怖くなくなるかな？」

頭の上からボソボソと囁かれる声。

かなり早いお兄ちゃんの心臓の音が聞こえる。

トクトク、トクトク。

聞いていると、さっきまでの恐怖がウソみたいに消えてゆくのを
感じる。

私はギュッとお兄ちゃんの体にしがみつく。

「あ、亜美ちゃん？」

「映画終わるまで、こうしてていい？」

「……う、うん」

「ありがとう」

それから、私たちはずっと無言で。

だけど、これまでよりもずっと近くにお兄ちゃんを感じた。

Lesson 5

夏休みが終わり、気がつけば秋も深まっていた。
秋といえば文化祭なわけで。その準備で、いつもより帰宅が遅く
なった。

カテキヨの時間までには、余裕を持って帰れると思っていたけれど
終わった時には、ギリギリの時間。
どうにかお兄ちゃんがより先に家に着かないと。

「やばいやばいやばあい!!!」

駅を出て、私は家までの道を必死で走っていた。

カテキヨの時間まで、あと10分もない。

焦れば焦るほど、なかなか家に辿り着けない。途中で携帯を落っ
ことしたり、信号に引っかかったり、普段、やらないようなドジを
してしまう。

それでもどうにか駅前の大通りを抜けて、住宅街に入る。

ここから家までのルートは二つ。街灯が整備された明るい道と、
薄暗い公園を突っ切る道。

いつもなら明るい方を通るけど

「……こっちの方が近いし、ね」

少し迷って公園の道を選ぶ。

大丈夫。少し暗くて人通りがないだけで、ここで事件なんて起き
たことないし、絶対大丈夫。

多少の不安を押し込めるように自分に言い聞かせる。

けれど、少し前から後ろで聞こえだした自分以外の足音が妙に怖い。

気づかなければ、どれだけよかったか。

私が早足で歩けば、後ろの人も早足になる。私が足を緩めれば、後ろの足音もゆっくりになる。

「うう……」

待つてよ、ちょっと待つてよ。ホラー物とかも嫌いだし、体力だつて自信ないし。怖いんだつてば。何の嫌がらせなの、これ。

私がいくらそう思つても、後ろから聞こえる足音は消えてくれない。それどころか、どんどん近付いて

「……お兄ちゃん、助けて」

小さく呟いた時、背後から「わっ！」と驚かされた。

その声に、今まで溜めに溜め込んだ恐怖がぶわつと出てきて、私は悲鳴と共に持つていた鞆をその人めがけて叩きつけた。

「うわっ!?!?」

反撃されると思つていなかった相手は、鞆をもちに頭に受けて蹲つてしまった。その隙に逃げようと私は踵を返す。

「あ、亜美ちゃん……」

後ろから苦しそうな、だけど、聞き覚えのある声。

「え?」

慌てて振り向くと、頭を押さえて蹲るお兄ちゃんがいた。

「……だ、大丈夫？ 本当にごめんね」

場所は変わって、私の部屋。

あれから、どうにかお兄ちゃんをつれて、家に帰って。

びっくりするお母さんからアイヌノンを受け取った私は「自分でするから」と遠慮するお兄ちゃんを制止して、負傷した箇所を押さええている。

「平気平気、これくらい」

「……ほんとに？」

「うん」

言葉とは裏腹にお兄ちゃんはどこか力なく笑う。

絶対、痛いんだ。嫌われちゃったらどうしよう……

「でも、ビックリしたよ。鞆ってすごい武器になるんだね」

「うう、ごめんなさい……」

「い、いや、あんなところで驚かそうとしたこっちが悪いんだし」

「そ、そうだよ。すっごく怖かったんだからね。変質者かと思っ
たもん……」

でも、そう思ってしまった自分が悲しい。

お兄ちゃんのことを好きなら足音で判別できるくらいにならないと。

私の中で、新たな目標が追加される。

お兄ちゃんは苦笑交じりに「……ごめんね」と言い、言葉が続けた。

「でも、あんな暗い公園を一人で歩いちゃダメだよ。危ないから」「……う、うん」

なんて話していると、ノックの音がして「亜美ー、あんた、ご飯はどうするの?」と、お母さんがドアから顔を覗かせる。

そういえば、いつもは学校から帰って、お兄ちゃんが来る前に食べている夜ご飯。今日はお兄ちゃんと一緒に家に到着したので、まだ済ませていない

だけど、ご飯を食べていたら勉強する時間が減る。っていうより、お兄ちゃんと一緒にいる時間が減る。こっちの都合でカテキョの時間を延ばすなんてできないし。

「あとで食べる」

「そう? お腹なっても知らないわよ」「ならないよ」

そう言った瞬間、くうっとお腹がなった。

な、なんでこんなタイミングで!? い、今の聞こえた?

おそるおそる隣に座るお兄ちゃんの方を見やる。

お兄ちゃんは、困ったような表情で「た、食べてきたほうがいいんじゃないかな?」と私を促した。

や、やっぱり聞こえたんだあ。なんか今日は最悪かも。
ずうんと落ち込んでしまっ。

「ほら、亮くんもこう言ってくれてるし。どうせなら亮くんも一緒に食べたらどうっ。」

「え、あ、いや、僕は済ませてきてるので」

「そう？ おばさん、寂しいわあ」

何言ってるの、このおばさん。お兄ちゃん、困ってるじゃん。じやなくって

こうなったら

「じゃあ、ここで食べる」

これしかない。

「そんな器用なこと」

「出来るから。ね、お兄ちゃんもそれでいいよね？」

「……亜美ちゃんとおばさんがそれでいいなら」

よし、オツケー。何問か問題が出来たら食べれるってルールにしちやえば、ちよっと楽しそうだし、お腹も満たされるし、オールオツケーだ。

「じゃ、持って来るね」

まだ少し渋るお母さんの背中を押して一緒に一階へ降りる。

「まったくあんたって子は」

「いいじゃん。勉強もできて、ご飯も食べれて、一石二鳥」

「はいはい」

お母さんの呆れた声を背中に受けながら、ご飯を載せたお盆を手にもって、お兄ちゃんの待っている部屋に戻る。

「あ、おかえり……と、大丈夫？」

「うん」

意外と重かった夜ご飯をテーブルに置くのを手伝ってもらって、いつもの定位置に座る。

「ご飯は正面。ハンバーグのいい匂いが鼻をくすぐる。なんとなくやる気一杯。」

「じゃ、勉強しましょ、勉強」

「ああ、うん。じゃあ、この問題をしようか？」

「あれ？ これどうしたの？」

出されたのは、ノートに手書きされた数学の問題。

「亜美ちゃんが下に行ってる間につくったんだよ。正解した数だけ、ご飯食べれるってことにしたらどうかかって」

「それって1問正解だったら、一口。で、2問正解だったら、二口、ってこと？」

「そうそう。ちょっと楽しいでしょ？」

「ふふ、うん」

それってさっき私が考えてたことと似てる。お兄ちゃんが同じようなこと考えてたなんて嬉しい。

「よし、がんばるぞー」

俄然^{がぜん}張り切つて、私はお兄ちゃんお手製の問題に取り掛かった。

そして、答え合わせ。20問中15問正解と、今までの成績から考えたらなかなかの出来だった。

「それじゃ、15口食べていいよ」

「はい」

と、返事をしたはいいけれど。

「ねえ、お兄ちゃん」

「ん？」

「一口つて、どれくらい食べていいの？」

「亜美ちゃんの好きなようにしていいよ」

昔みたいにこんな感じでもいいし、なんて言って、お兄ちゃんがぶくうつと頬を膨らませる。

「そんなことしてないよ」

「してたよー。俺のお菓子口いっぱい頬張ってさー」

「してない」

変なことばかり覚えてるんだから。まったくもう、と思いながら、ご飯に視線を落とす。

お兄ちゃんはニコニコと私を見ている。

さすがにこの年で口いっぱい頬張るなんて、ましてや、その姿をお兄ちゃんに見られるなんて恥ずかしい。

「んと、これくらいかな」

いつもの一口より気持ち少なめにして。

「いただきますあす」

もぐもぐ。……「じっくん。」

「おいしい？」

「う、うん」

「数えてるからどんどん食べていいよ」

「……あ、うん」

……っていうか、待って。今、気づいたんだけど、この状況って、実はすつごく恥ずかしくない？

口いっぱい頬張って食べてるわけじゃないけど、そんなこと以前に、好きな人に食事してる姿をまじまじと見つめられるのって……絶対、恥ずかしいよ。

思えば思う程、自分の顔が赤く染まってくのが分かる。こんな顔色、隠しようがないがなくてくらい。次の一口にも、なかなかいけない。

そうなったら、いくら鈍感なお兄ちゃんでも当然、私の様子がおかしいってことに気づく。

「……どうしたの？」

「あ、えっと……」

「なにになに？」

「たっ、食べてると」見られるの、ちょっと恥ずかしいなって気がして……」

「あ」

カカカッと、一気に染まるお兄ちゃんの頬。それは顔にも耳にも伝染して。

「ご、ごめんっ！！ み、見ないから！！ 食べ終わったら教えて……！」

くるっと勢いよく回れ右をして、私に背を向ける。

少しの安堵。私はゆっくりと料理を口に運ぶ。

お兄ちゃんの背中はカチンコチンに固まったまま。チラリともこちらをうかがう様子は見られない。

なんか、なんだか。

自分で言っておいてなんだけど 同じ部屋にいるのに、お兄ちゃん私のほうを見てくれないことが、ちょっと寂しい、かも。

「……お、お兄ちゃん」

箸をお茶碗の淵に置いて。背中を向けてるお兄ちゃんの服の袖を引っ張る。

「な、何？」

「……」

「あ、もう食べ終わった？」

「まだ、だけど」

「そ、そう」

私の方へ向き直すのをやめて、また背中を向けるお兄ちゃん。私はもう一回、お兄ちゃんの服の袖を引っ張る。

「ど、どうしたの？」

「……やっぱり、こっち向いてて」

「……え？」

「だって、ちゃんとお兄ちゃんが数えてくれないと、私、ご飯全部食べちゃうよ？」

「え、で、でも……」

「お兄ちゃん、数えて」

声が震えてるのが、自分でも分かる。

こんな恥ずかしいお願いして、もしも、聞いてもらえなかったらどうしよう。

もう恥ずかしすぎて、全身茹でダコみたいだ。そんな顔見られたくなくて、俯いて唇を噛んでいると、ゆっくりとお兄ちゃんが私の方を向き直る姿が見えた。

顔をあげると、やっぱりお兄ちゃんの顔も赤くて。

「……い、今、何回目？」

「えっと……5回目」

「……じゃあ、あと10回だね」

「う、うん」

お兄ちゃんに見られながら、箸を持つ手を再開する。

恥ずかしい。めっちゃくちゃ恥ずかしい。でも、どこか嬉しい自分がいる。

今、お兄ちゃんの目に映っているのは私だけ。そんな喜び。

お腹が空いているはずなのに、胸いっぱいになって。正直言って、味なんて全然分からなくなって。

こんなにもお兄ちゃんのことを好きな自分に驚く。

ずっとこんな瞬間が続けばいいのに。ずっと見つめてくれたらいいのに。心底、そう思う。

でも、お兄ちゃんの一言が私を現実に戻した。

「……10」

「あ、そ、そっか」

次の一口へと伸ばそうとした手を止める。第一回目の食事タイムは、これで終わり。

次は、またお兄ちゃんが作ってくれた問題をやるはずなんだけど、どうしてか、お兄ちゃんは動いてくれない。

「……お兄ちゃん？」

どことなく熱っぽいお兄ちゃんの瞳。その瞳は、私の顔でも問題集でもなくて、ただ、私の唇を見つめてて。

どうしようもなく恥ずかしくなって、私は俯いてしまった。

「あつ、ご、ごめん！ えっと、つ、次の問題、しないとね！」

あたふたと我に戻るお兄ちゃん。

お兄ちゃんが今、何を考えてたのかくらい、分かっている。料理を口に運ぶたびに、私の唇の方へ注がれたお兄ちゃんの視線をずっと感じてたんだもん。多分、私と同じこと想像してた。

次、頑張ったらしてくれるかな？ 今度はほっぺじゃなくて、唇に そんな想いが強くて、意識しすぎた結果、次の問題は、15問中0問という惨敗っぷり。

結局、その日はカテキョの時間が終わるまで、私は料理を口にすることが出来なかった。

Lesson・6

文化祭まであと三日。準備もいよいよ大詰めを迎えて、学校中があわただしい喧騒に包まれている。そんな中、奈津子が言った。

「例のカテキヨのお兄ちゃん、文化祭に呼ばないの？」

「え？」

私は奈津子の問いかけに思わず作業の手を止める。

「だからー。例のカテキヨのお兄ちゃん、文化祭に呼ばないの？
って言ったんだけど」

「それは聞こえてたけど。なんで呼ぶの？」

「そりゃ、付き合ってたら当然でしょーが」

奈津子の勘違い。悔しいけど、私とお兄ちゃんはまだそんな仲じゃない。

私が黙っていると、奈津子はまずいことを聞いたという風に顔をしかませ「……もしかして、もう終わってる？」と、言った。

なんてことを！

「終わってないよ。始まってもないし」

即、否定する。すると、奈津子は目を丸くさせた。

「ウツソ!? あんた、それじゃ、今までなにしてたの?」

「なにつて……勉強」

「じゃなくて……告ったり告らせるようにアピったりしなかったの

「？」

「し、してるけど、お兄ちゃんは鈍いし、照れ屋さんだし」

そこがいいんだけど、なんて言っていると、奈津子は呆れたように頭を振り

「……………それってさ、女として見られてないんじゃない？」

なんてことを！！

「み、見られてるよ！……………多分」

即即、否定する。奈津子が、はっと鼻で笑う。

「その根拠は？」

「だって、キ、キスしてくれたし……………ほっぺにだけど」

「今時、ほっぺって。小学生以下じゃん。お兄ちゃんって大学生でしょ。ありえないんですけど」

「ありえないって言われてもありえるんだもん」

「あー、分かった。ぶっちゃけ、お兄ちゃんってブサメン？」

「な！ お兄ちゃんはカッコイイよ。ちよつと頼りないだけで……………」

「カッコよかつたら、普通もてるじゃん？ そんな照れ屋さんとか考えにくいんだよね。慣れるだろうし」

「……………それは、女の子に免疫があんまりないからだよ。お兄ちゃん、中高一貫の男子校だったし。私がかつちりマークして、近寄ってくる女の人は追い払っちゃってたし」

そう、お兄ちゃんがあんなにシャイで初心なのは、半分、いや、それ以上、私のせいでもあるのだ。いくら子供だったとはいえ、ちよつと悪いことしたなって今は思ってたよりもする。

「まあ、イケメンでもブサメンでもいいんだけど、文化祭には呼びなよ」

「どうして？」

「亜美が意外とモテること知ったら、なんか進展するかもよ」

「ありえないよ。私、モテないし」

私は溜息をつく。

奈津子が分からないという風に首をひねった。

「なんでそこまで嫌がるかなあ？」

そんな理由は簡単。うちのクラスの出し物。なにをとち狂ったのか、コスプレ喫茶なんてものをやることになっている。女子も男子も公平にくじ引きで、コスプレするものを決めたんだけど。

「あー、分かった。メイド姿が恥ずかしくて見られたくないとかあ？」

奈津子がポンと手を叩き、言った。

「凶星だ。コクリと頷く。」

そう、私は『お帰りなさいませ、ご主人さま』ってやつで、有名なメイドさんの格好をすることになっている。

でも、これはまだマシな方。なんたって、本当はバニーガールだったのだ。

くじを持ったまま固まる私を見て、奈津子が代わってくれたから、なんとか出来る範囲のコスチュームになったけれど、それでも、やっぱりお兄ちゃんに見られるのは恥ずかしい。

「ふーん、なるほどねえ」

「だから、いいの。お兄ちゃんと呼ばなくて」

「いや、絶対呼んでもらう」

「なんでよー？」

「ぶっちゃん、私がお兄ちゃんを見てみたいから」

奈津子はさも当然と言わんばかりに言った。ガクツと力が抜ける。

「あのねー、奈津子」

「そうそう、もし、呼ばないなら衣装交換なし」

「ちよっ、ちよっと待ってよ！？ なにそれ」

「脅迫というものです」

「あう……」

にこやかな奈津子の脅迫に私は抵抗する手段を持っていなかった。

そんなわけで。

二人きりのいつもの時間。休憩中に、私はお兄ちゃんに切り出してみた。

「お、お兄ちゃん」

「ん？」

「あ、あのね、今度の土曜日ってヒマ……じゃないよね？」

恐る恐る聞いてみる。

もし、ヒマじゃなかったら恥ずかしい格好を見られなくてすむわけ。

なかば祈るようにお兄ちゃんの返事を待つ。
でも

「多分、ヒマだよ」

お兄ちゃんは、そうニコリと笑った。

「そ、そうなんだ。なにか予定入る予定は？」

「予定入る予定？ ないと思うけど、なんで？」

「あ、ううん。大したことじゃないんだけど……」

「うん？ なに？」

こうなったら仕方ない。バニーガール姿を大勢の人に見られるよりは、メイド姿の方がまだマシだ。

「えっとね、これ、文化祭のチケット」

意を決して、ポケットの中に用意していたチケットをお兄ちゃんに差し出す。

「もし、来れたら……来て」

「あ、う、うん」

「無理しなくていいから。用事入ったらそっち優先し」

「なにがあっても行く」

私の言葉を遮って、お兄ちゃんが言う。

いや、そこまで力いれなくても……ちょっと嬉しいけど。

それから私たちは、文化祭当日の予定を話し合った。

それで気づいたんだけど、メイド姿をお兄ちゃんに見られないようにするのは、案外、簡単なことなのかもしれない。

午前中、私はコスプレ喫茶の仕事があるので、お兄ちゃんと一緒にはいられない。

だから、お兄ちゃんが午後から来てくれれば、その時にはもういつもの制服姿の私に戻っているっていう寸法だ。

そう考えて、コスプレの部分は伏せて、お兄ちゃんにそのことを伝えると「働いてる亜美ちゃんも見に行くよ」と、にこやかに言われてしまった。

コスプレ喫茶だって知ったらどんな顔するんだろう。

っていうか、メイド姿を見られることを抜きにしても、私のクラスを見に来るのはやめてほしかったりする。

だって、結構エッチイコスプレがあるんだもん。お兄ちゃんがそっちをガン見しちゃったりしたら、なんかすっごくヤだ。

多分、ないと思うけど。それなら私のことガン見の方がいいかも。なににせよ、ただの喫茶店じゃないってこと、お兄ちゃんに言うておいたほうがいいかもしれない。教室のドア開けた瞬間、驚きのあまり卒倒なんてされちゃったら困るし。

「ねえ、お兄ちゃん」

「なに？」

「お兄ちゃんってコスプレ、好き？」

丁度、お茶に口をつけていたお兄ちゃんは、私の問いに「ぶはっ」とむせて咳き込んだ。

「だ、大丈夫？」

「……だ、大丈夫だけど」

まだ少し苦しそうな声で答えたお兄ちゃんは一度、咳き込んでから「急に変なこと聞かないでよ」と続けた。

「うん、ゴメンね。それで、好き嫌い、どっち？」

「えっと……なんで？」

「……文化祭でするから」

「コスプレを？」

「そう。コスプレ喫茶、みたいな」

お兄ちゃんの目がまん丸になる。それから「最近の高校ってすいいな」と感心したように言った。

「っていうか、うちの学校フリーダムすぎるの」

「なるほどね」

まん丸だったお兄ちゃんの目はもう落ち着きを取り戻して、柔らかく細められている。

「亜美ちゃんは、どんな格好するの？」

「え？……メイドさん」

「へえ。それは見ないともったいないね」

「え！？」

「メチャクチャ楽しみになってきた」

お兄ちゃんはうきうきしたように言う。

ちよっとお兄ちゃん？

なんかキャラが違うっていうか、もしかして、すっごくコスプレ好きですか？

今まで知らなかった事実には、私は色々な意味で不安になった。

Lesson 7

文化祭当日。

我がクラスのコスプレ喫茶は思いのほか好評で、まさにネコの手も借りたいほどの忙しさ。

予想はしてたけど、折角、来てくれたお兄ちゃんと話すこともままならない。でも、もしヒマだったとしても、上手く話せたかどうか分からない。

だって

10分ほど前に来店したお兄ちゃんの隣には菊池さんがいて。

「一緒に行くってきかなくってさ」

なんて、困ったように頭をかいたお兄ちゃん。

本当にそれだけなのかな、と嫌でも勘ぐってしまう。今だって仲良く話してるし。

「はあ……」

他のテーブルを片付けて、教室を二分しているパーティションの裏に入るなり、私は溜息をついた。

「なにそのふくれっ面」

色んな人に声をかけられていたウサギちゃん、もとい、奈津子がからかうような調子で言ってくる。

「……しょうがないでしょ」

両手でほっぺを押さえながら、そう返す。

奈津子は「まあねえ」と頷くと、パーティーシヨンの隙間からお兄ちゃんたちの席を窺いみた。

「あの女がライバルだったら超手ごわそう。っていうか、亜美に勝ち目なさそう」

「そこまで言わなくても……」

自分でも薄々思っていたことを言われて、がっくりと落ち込む。

奈津子がぼんぼんと慰めるように私の肩を叩き「落ち込むよりもまず突撃！ これ大事。テストに出るから」と、にこやかな笑顔で言い放った。

「……意味が分かんないんだけど」

「あの仲良しさんたちの席に突撃するってことよ」

言うなり、奈津子はパーティーシヨンから出て行くこととする。

「ダメだよ。仕事まだあるでしょ」

私は慌ててその腕を引き止めた。けれど、奈津子はやっぱりこやかに。

「仕事より大事なものがある！ 亜美が行かないなら私が行く。ぶっちゃけ、お兄ちゃんと話してみたいし」

「それが本音なんじゃん」

「だってさー、マジでイケメンじゃん。正直、もっとヒョロヒョロでばさばさ頭のキモメン想像してた」

そんなキモそうな人、好きにならない、と思う。

でも、どうだろ？ 中身がお兄ちゃんだったら？ 好きになったのかな？

うーん、想像できない。とりあえず

「お兄ちゃんは、かつこいって言ったでしょ」

「うん。だから、一応、狙ってみようかと」

「なっ!？」

聞き捨てならない奈津子のセリフに言葉を失う。

奈津子は固まる私の目の前で手をひらひらさせたり、ほっぺをつんつん小突いてきたり。

そして、私がフリーズしてるのを確認し終わると「冗談冗談。私は友情を大事にする女ですよ」と、感情のこもっていない声で言った。

「……メチャクチャ棒読みなんですけど」

「あははー。と、冗談はさておいて、少しくらいならサボっても大丈夫でしょ。ちょっと話しにいこうよ」

「な、奈津子ー」

腕を引っ張られるがままにパーテーションの外に出る。

少しの間、サボっていたのを咎めるように、クラスメイトが、じとつとした目で私たちを見てくる。

「ねえ、奈津子。まずいつて。これ以上、仕事サボるの」

「大丈夫大丈夫。あとで話つけるから」

奈津子はそう言いながらも、クラスメイトに両手を合わせて無言のお願いをしている。

あとでじゃなくて、今、話つけてんじゃん。ってのは、おいとい

て 気がつけば、お兄ちゃんたちのテーブル近く。

「亜美ちゃん、もう終わったの？」

お兄ちゃんが聞いてくる。

「ま、ただだけど……」

「お兄ちゃん、この格好気にいつてくれたかな？ って亜美が心配
そうだったから、つれてきちゃいました」

奈津子が口を挟む。まったくの大嘘だ。

文句の一つでも言おうと、奈津子を睨んだ。その時

「あ……えっと、よく似合ってるよ。すごくカワイイ」

お兄ちゃんが顔を赤くしながらも言ってくれた。

騙されてるよ、お兄ちゃん……

でも、嬉しくて、奈津子のウソにちよつと感謝。

「ホントすごくカワイイよ、亜美ちゃん」

「え？ あ、ありがとうございます」

菊池さんに言われると、ちよつと複雑。

「私はどうですかあ？」

「えっと……いいんじゃないかな」

奈津子の問いかけに、お兄ちゃんは困ったように答え、チラリと
助けを求めるように私を見てきた。

それもそのはず。お兄ちゃんと奈津子は初対面だ。誰かも分から

ない人に馴れ馴れしくされたら、困って当たり前。」

「お兄ちゃん、この子、奈津子っていつて私の友達なの。」

仕方なく、奈津子を紹介する。

すると、お兄ちゃんは

「いつも亜美ちゃんがお世話になってます」

なんて、天然なんだか本気なんだか、よく分からない言葉を真顔で言つてのけた。ぷつと奈津子が小さく吹き出す。隣で菊池さんもクスクス笑っている。

それにも気づかずお兄ちゃんは「片瀬亮です、よろしく」と言葉を続けた。

笑いを堪えていた奈津子が小さく咳払いをすると「よろしく、亮くん。はい、シェイクハーンズ」と、お兄ちゃんの手を取り、握手をした。

お兄ちゃんは目が点。私もだけど。驚いている場合じゃない。変に思われないよう、さりげなく、奈津子とお兄ちゃんの間を割って入る。

「お兄ちゃん、私たちまだ仕事あるからそろそろ……えっと、菊池さんと色々まわってきたら？」

「え、でも」

「だって、ずつとここだと退屈でしょ？ 終わったらメールするし、ね？」

奈津子が口を挟めないように矢継ぎ早に言う。

お兄ちゃんは少し考えて「んー、じゃあ、そうしようか？」と、菊池さんに向けて言った。

「そうね。高校なんて久しぶりだし、楽しいかも」

菊池さんが頷き、二人は立ち上がる。

私はそんな二人が教室を出て行くのを見送って、はあ、と溜息をついた。

「このバカちゃんがあっ！」

奈津子が某ドラマのクサイセリフばかり言う先生の真似をして、私の頭をぺしっと叩く。

「いったいなあ」

「あんたって、ワケ分かんない。あれじゃ、応援してるみたいじゃん」

「分かってるよ……」

「せっかく、私が応援してあげてんに」

「やれやれと言いださんばかりの態度にカチンときた私は文句を口にする。」

「なに言ってるの、奈津子がお兄ちゃんにベタベタベタするから悪いんじゃない」

「あの女の様子を探ってたのよ」

「本当に?」

「ううん。本当は、あわよくば私が亮くんをゲットしようかと」

信じた私がバカだった。がっくりと肩を落とす。

「やっぱりそっちなんじゃない」

「ウソウソ。そんなことするわけないでしょ。私は恋愛より友情を大事にする女で有名なのに」

「はじめて知ったよ、そんなの」

「そりゃ、そうでしょ。今、そういうことにしたんだもん」

ケロッと言いつ切る奈津子にもうなにか言う気力もない。私は奈津子を置いて仕事に戻った。

「ちよつと亜美」

奈津子が慌てて追いかけてくる。

そして、私が気づかなかったことを小声で教えてくれた。

お兄ちゃんの状態。

私以外の人と話している時のお兄ちゃんは、赤くなったり、しどろもどろになったり、しないってこと。

他のコスプレ店員たちを見てもそうだったってこと。

それってつまり、私のことを意識してるってことなんじゃないかなって。

『終わったよ〜^^』

クラスでの仕事が終わったことをお兄ちゃんに教えるメールを送信する。

『そこで待ってて。すぐに行くから』

すぐに返事が返ってくる。

はい、と心の中で返事をして、私は教室の入り口でお兄ちゃんが来るのを待つことにした。

ちなみに奈津子はというと、委員長にもう少しだけ教室に居てほしいと懇願されて、珈琲を運んでいる。

渋々、引き受けたみたいだけど、さっき来たお客さんと意気投合したみたいで、今は楽しそうにその人と喋っている。だから、結果的にはよかったのかな。なんてことを考えていると

「ねえ、君さ、さっきメイドしてた子でしょ？」

いつの間にか私の前には見知らぬ男の人。

お兄ちゃんと一緒の年くらいだろうか？ でも、雰囲気全然違う。ちょっと怖い。

「俺、客でいたんだけど覚えてない？」

覚えてない。私の返事を待たずにその人は言葉を続ける。

「ところで、もうヒマなの？ 俺、ダチとはぐれちゃってさー、ヒマなんだよね。よかったら一緒に回ってくんない？」

「え？」

「いいっしょ？ ね？ ね？」

「いえ、あの、私、待ち合わせしてるんで」

「えー、そんなこと言わないですよ。いいじゃん、行くつよ」

そう言って、男の人は私の腕をつかんでくる。

ちよっとなんなの、この人。怖すぎる。奈津子は、全く気づいてないし。どうしよう。どうしたらいいんだろう。お兄ちゃん 心

の中でお兄ちゃんに助けを呼んだ、その時。私の声が聞こえたかのようなタイミングで、お兄ちゃんが来てくれた。

「俺のカノジヨになにしてんの？」

そう言っつて、お兄ちゃんは私の腕をつかむ男の腕を乱暴に振り払い、私を引き寄せる。

男の人はチツと舌打ちして、走り去っていった。

お兄ちゃんはその背中を確認すると、ふうつと溜息をつき、私に視線を向ける。

「大丈夫だった？　なんか変なことされたりしてない？」

「う、うん。ちょっとしつこくて怖かったけど」

「ったく、こんなところでナンパとかすんなよなあ」

男の人が走り去った方に再び視線を戻し、お兄ちゃんはぶつぶつ文句を言う。私も同感。

でも、そんなことよりさっきのお兄ちゃん言葉。

俺のカノジヨって。それって私のこと、だよな？　それってつまり。

「ねえ、お兄ちゃん」

「ん？」

「さっき、私のこと……カ、カノジヨって言ったよね？」

私の言葉にお兄ちゃんは私が気分を害したと勘違いしてるみたい。さっきの頼もしい姿とはまるで別人のように、かなりわたわたしなから

「あー、えーっと、ごめんね。ほら、知り合いつて言うよりカ

ノジョって言った方が効果あるっていうかなんていうか……その、嫌だったよね、いきなりそんなこと言われたら」

そう謝ってくる。

少しも嫌じゃなかったのに。ううん、むしろ、嬉しかった。そう言ってもらえて。

だから。

「嫌じゃ、なかったよ」

「え？」

「お兄ちゃんのカノジョって言われたの、嫌じゃなかったよ」

私は私の気持ちを素直に伝えた。

ドキドキと心臓が早鐘を打つ。上手くお兄ちゃんの顔が見れなくて、目を伏せる。

お兄ちゃんは、今、どんな顔してるんだろう。今の私の言葉をどう思ったんだろう。

お兄ちゃんは何も言わない。

周囲はざわざわと騒がしいのに、私たちの周りだけ音が消えてなくなっただけみたい。

私は耐え切れなくなって視線をあげた。と、同時に、手に、手の感触。

びつくりしてお兄ちゃんを見ると、お兄ちゃんは「よかった」と、はにかんだ笑みを浮かべて言った。

よかった？

一瞬、意味が分からなくて？マークが頭に浮かぶ。

でも、すぐに気づく。私が嫌がってなくてよかったってことかなって。

そういうことじゃなくて……本当はもっと別の言葉を望んでいたんだけど。繋いだ手からストリートにお兄ちゃんの思いが伝わってきて、今日のところはこれでいいやって思ってしまう。

私は、お兄ちゃんの手をぎゅっつと握りかえす。

お兄ちゃんは、一瞬ビックリしたようだけど、同じようにぎゅっとしてくれた。

「な、なにを見て回ろっか？」

照れ隠しなのか、お兄ちゃんが唐突に聞いてくる。

けど、正直、私はもうこのまま帰りたい気分。幸い、クラスの仕事は終わっているし

「ねえ、お兄ちゃん」

「ん？」

「今日はもう帰ろっか？」

「え？ いいの？」

「うん。お仕事ない人は、いつでも帰っていいことになってるから。ほら、結構、帰ってる人たちがいるでしょ」

そう言っつて、窓の外を見やる。お兄ちゃんもそちらに視線を動かす。

「亜美ちゃんの学校ってホント自由だね」

「うん。私もそう思う」

「じゃ、帰ろっか。家まで送るよ」

「ありがとー。あ、そういえば、菊池さんは？ 一緒じゃなかったの？」

さっきのごたごたでうつかりしてたけど、お兄ちゃんは助けてくれた時からずっと一人だ。菊池さんの姿が見当たらない。

「ああ、菊池さんなら亜美ちゃんのメイド姿が見れたから満足とか言っただけだよ」

「そ、そうなんだ……」

さすがに私のメイド姿目当てってことはないだろう。もしかして、気を遣ってくれたのかな？

とにかく、二人つきりなことに感謝しながら、私はお兄ちゃんと手を繋いで家に帰った。

今、私はお兄ちゃんの部屋で勉強をしている。
家庭教師の日でもないのに、どうしてこんなことになっているか
というところ

「亮くんの教え方わかりやすいですよー」

「そうかな」

「うん。学校よりも全然分かりやすい。次のテスト、私すごいこと
になるかも」

「ははは」

すぐ傍で繰り広げられる会話。

そう全ては、今日返ってきた小テストから始まった。

「亜美、マジで成績上がってんね……」

結果を見比べながら奈津子が言う。

「それはもう。お兄ちゃんのおかげでね」

私は、えへんと胸を張って。

すると、奈津子は少し真面目な顔になって「私も家庭教師しても
らおっかな」と言った。

「……誰に？」

「お兄ちゃん」

「へえ……つて、ええ!？」

一瞬、聞き逃しそうになった。

けれど、確かに奈津子はお兄ちゃんと言っていた。

「私もあんな家庭教師ならやる気であるかも」

「ダ、ダメ! ゼーったい、ダメ!!!」

きつぱりと奈津子の意見を却下する。

家庭教師のお兄ちゃんは私専用なんだ。週一回だけだけど。

「いいじゃん。別に変な意味じゃないんだし」

「どんな意味でもダメ! つていうか、お兄ちゃんは忙しいの。私だつてムリしてお願いしてもらってるだから、これ以上カテキョの時間なんて増やせないと思うな」

別にウソは言っていない。

お兄ちゃんが忙しいのも、ムリしてお願いしたのも事実だ。

私以外の人と二人きりで勉強をしてほしくないっていうのが一番にあるのも事実だけど。

「ふうん。じゃあさ、一回だけ体験授業」

「却下」

「ちよつ、即答すぎ」

呆れたように奈津子が笑う。

でも、考えたって答えは一緒だもん。

「ねえ、亜美。嫉妬深くて独占欲強いと男の人は嫌だと思っよ」
「うっ……」

「亜美は子供だから分かんないかもしれないけどさー」

必死に奈津子に訴えても笑っているだけで聞き入れてくれない。
それどころか、もう体験授業を受ける気満々だ。

「今日は？ 今日授業あるの？」

「あつても言わない！」

「うわっ、マジ子供。じゃ、直接聞いちゃおっと」

「はあ？ 電話番号なんか知らな……って、ちよっとお！」

気付いたら、奈津子の手には私の携帯。

すぐにお兄ちゃんの番号が出てくる。

「どうする？ 私が聞くか、亜美が聞いてくれるか、どっちにする
？」

奈津子の意地悪な問いかけ。

私はニヤニヤしている奈津子の手から携帯を取り返し、溜息をつ
きながら、表示されている番号にコールした。

『もしもし』

すぐにお兄ちゃんの声。

ああ、幸せ。なんて思ってる場合じゃないんだけど。

「あ、お兄ちゃん……今、大丈夫かな？」

『うん、大丈夫だけど、どうかした？』

「あのね……えっと、今日勉強教えてもらっていい？」

『今日？唐突だね』

「あ、ムリならいいの。急だし、ムリだよね？」

話をNG方向へ無理矢理もっていく。

私が我慢していると勘違いしたのか、お兄ちゃんは少し笑って『大丈夫だよ』と、言ってくれた。

これが私とお兄ちゃんだけなら飛び上がりたいほど嬉しいこと。でも、隣から私の肘をつついてくる存在。

分かっているよ、と目だけで答えて私はお兄ちゃんに問いかける。

「あのね、お兄ちゃん。実は、私一人じゃないの」

『え？どういうこと？』

「友達と一緒に勉強したいって。あ、この間、会ったでしょ、奈津子」

『ああ、あの子か』

「やっぱり、ダメだよね？」

お願い。ダメって言って。

『いいよ。大丈夫、二人でおいで』

私の祈りは通じず、優しいお兄ちゃんは快諾してくれた。

そんなわけで。私と奈津子はお兄ちゃんの特別授業を受けている。始まってから、もう一時間。そろそろ休憩かな、なんて思ってい

ると「もうムリー」と、奈津子が両手をあげて後ろに倒れこんだ。

「疲れるの早すぎ」

お兄ちゃんの手前、ちょっとだけいい子ぶって、奈津子の手を引っ張り起こしてやる。

「亜美だって、この間まで10分くらいしか勉強できなかったけれど」

「なっ、そ、そんなこと今言わなくてもいいでしょ」

「マジなんですよ、これ。一緒に宿題とかしていると、亜美がいつつも『これくらいで大丈夫だよ、休憩しようよ』って、私を誘惑するんですよー」

お兄ちゃんに家庭教師をしてもらう前までの私の話を、奈津子がお兄ちゃんにぶっちゃける。

お兄ちゃんはどう反応したらいいのか困ったような顔で「あはは……」と笑っている。

「もういいでしょ。今はちゃんと宿題もしてるし、すぐ休憩なんてしないんだから」

「そうなんだよねえ。一人で抜け駆けして、テストでいい点取ってるし……それもこれも全部亮くんのおかげなんだよねー？」

ズバリ言われて、赤くなる。お兄ちゃんまで赤くなっている。

奈津子が見過ごせないというように目を細めて

「なに二人して赤くなってるの？ 怪しい」

「あ、あ、怪しいってなにが？」

「まさか、家庭教師にかこつけてあんなことやそんなことまで、教

えちやってるんじゃないのー」

「そんなわけ」

「なにもしてないよ！」

私が否定するよりも早く、お兄ちゃんが大きく否定。ほら、シャイだから。

でも、そこまで力いっぱい否定しなくてもいいのに。

それに、何もしてなくはないよね。

キス未遂があつたし、映画見に行つたし、その時、抱きしめられ、唇ずつと見られた時があつたし。あと、家にも行つたし、手も繋いだし。

何気に、色々な初めてを経験してる気がする。

それなのに、いまだにはつきりとした関係を言い表せない、微妙な関係。

いつかはつきりする日がくるのかな？

そんなことを考えたら、なんか溜息が出た。

結局、休憩からあとはほとんど雑談になつてしまつた特別授業。

お兄ちゃんは少しだけ申し訳なさそうだったけど、奈津子は全く気にしてないみたいだった。

どっちかっていうと、こっちが目的だったんじゃないかって言うくらい話してたし。

そんな雑談も一段落して、私たちはそろそろお暇することにした。そのことをお兄ちゃんに言うと、時間も時間だったので駅まで送

つてくれることになった。

「それじゃ、気をつけて帰るんだよ」

「はい」

「また教えてくださいね！って、いたっ」

改札の前で、さりげなく次の勉強の約束を取り付けようとした奈津子の足をこっそり踏みつける。

奈津子が恨めしそうにこっちを睨んでくるけど知らん振り。

「今日は本当にありがとう、お兄ちゃん」

「いや、これくらいなら全然」

「今度は私のお家でね」

「うん。気をつけて」

お兄ちゃんに手を振って改札を潜る。

呆れて先に行ってしまった奈津子が「ラブラブだね」と私を小突いた。

「そう見える？」

「見えるけど、進展してないの？」

「うん」

「告っちゃえばいいじゃん」

「んー、でもさー」

ホームに向かいながら話を続けていると

「あれ？ 亜美ちゃん？ 亜美ちゃんでしょ」

前方から手を振る綺麗なお姉さんの姿が。って、菊池さんだ。

「こんなところで会うなんてビックリ。片瀬くんのところに行ってたの？」

「あ、はい」

「あーん、もうちょっと早めに行けばよかった。そしたら、亜美ちゃんと遊べたのに」

菊池さんががっくりと肩を落とす。

え？ってことは、まさか。

「え？もしかして、お姉さんこれから亮君のところに行くんですか？」

私の抱いた疑問を奈津子が口にしてくれる。

菊池さんは一瞬、奈津子が分からなかったようだけど、すぐに思い出したみたい。

「あら。あなた、確か文化祭の時に会った子よね」

「はい。んで、どうなんですか？」

「ええ、ちよっとノート写させてもらおうと思って。私、今日の講義サボっちゃったから」

まいったまいったという風に笑う菊池さん。

今日の講義のことなんて知らないし。まいったのはこっちだ。お兄ちゃんと菊池さんが二人きりなんて。

引き返そうかな？

でも、それも変だし。

考えている間に「それじゃあ、今度一緒に遊ぼうね」と言いながら、菊池さんは改札の向こうに行ってしまった。
その背中を見送りながら

「私よりも、あのの方が余裕で危険だと思うよ」

奈津子がポンポンと励ますように私の肩を叩いた。

そんなの言われなくても分かってるよ……

「ううー」

お兄ちゃんからメールが来ない。

お兄ちゃんが忙しい時間帯には送らないようにも気をつけているから、いつもなら遅くても1時間以内には返してくれるのに。返信が来なくなってもう5時間近く。

キリがよくて返事が来ないって可能性はない。

だって、最後にしたのは宿題に関する質問メールだ。ハテナマークで終わってるのに、お兄ちゃんがキリがいいなんて思うわけがない。

「むうー」

考えれば考えるほど、悪い方悪い方へ思考が動いてしまう。

もしかして、ウザイ、と思われたとか。はたまた、事故に巻き込まれた、とか。

しかし、こうして考えていても時間は刻々と流れていく。メールの着信音は一向に鳴る気配すらない。

お兄ちゃんとメアドを交換してメールをするようになってから、こんな事態は初めてで、どうしたらいいか分からない。

『で、私に電話してきたの?』

「そう」

呆れたような奈津子の声に私は力なく頷く。

『これ携帯？』

「ううん、家電。携帯は、だって、使えないでしょ。すぐメール見たいもん」

『あっそ』

「つめたーい」

『あのねー、そんなに気になるなら家に行けばいいじゃん』

「あ、そっか」

その手があった。今すぐ行けば、そんなに遅くなることはない。ちよつとだけでもお兄ちゃんの顔を見たら安心できる。

「ありがと、奈津子」

お礼もおざなりに通話を終わると、私は上着を羽織って、家を飛び出した。

電車に乗る前に一度、お兄ちゃんに『今からお家に行ってもいい？』とメールをしたけれど、相変わらず、返事は来ない。

そうこうするうちにお兄ちゃんのアパートに着いてしまった。

ドキドキしながらインターホンを押してみる。出てくる気配はない。

ドアに耳を当てて、中の音を探ってみる。

傍から見たらヤバイ人っぽいけど、気にしてられない。

中はシンと静まり返っている。なんの音もしない。

家にもいない。メールもない。本格的に心配になってきた。

そんな不安な心を煽るように、空はなんだか曇っている。

「…………お兄ちゃん」

反応してよ。出てきてよ。

寂しくなつて、携帯に電話をかけてみると、さっきまでなんの音もしなかった部屋の中から、聞き覚えのある着メロが聞こえてきた。

「…………え？」

コールは鳴らしたままで、再度、ドアに耳を当ててみる。
やっぱり聞こえる。

でも、なんで？

お兄ちゃんがいる気配はないのに。携帯だけ。

「…………亜美ちゃん？」

さらにドアへばりついていると、後ろから聞き覚えのある声がした。

「お、お兄ちゃん」

ビクツと飛び上がりそうになるのをかろうじて押さえて、私はなんとか平静を保ちつつ振り返る。お兄ちゃんは私を見て顔を綻ばせた。

「やっぱり亜美ちゃんだ。なにしてるの？」

「…………え、えっと、あの」

「とりあえず、中入りなよ。寒いし」
「う、うん」

お兄ちゃんに促されて、部屋に入る。

「ねえ、亜美ちゃん」

「な、なに？」

「これ、取った方がいいの？」

お兄ちゃんは鳴り続けている携帯を手に取り私を見やった。

なんだろう？ …… あ、そうだ。私が鳴らしてるんだった。

「あ、ああ！ ごめん、切るの忘れてた」

慌てて携帯を切ると、部屋の中に静寂が訪れる。

静かすぎて、なんか色々意識してしまう。

「け、携帯お家にあっただね」

「そうそう。友達が急に来てさ、ムリヤリ外連れてかれちゃって忘れたんだ」

そういいながら、お兄ちゃんは携帯をチェックする。

きっと私が送った何通ものメールが表示されるはずだ。うざいって思われたら、どうしよう。

そんな私の不安は杞憂に終わった。

携帯をチェックするなりお兄ちゃんは「……ご、ごめん、亜美ちゃん」と慌てたように頭を下げた。

「返信ないから、心配して来てくれたんだよね？」

「……ん」

「ホントにごめん！」

「……そんなに謝らなくていいよ。私が勝手に心配しただけだから」

ブンブンと手を振って笑ってみせると、お兄ちゃんはホツとしたように表情を緩めた。

とにかく、理由が分かってよかった。

急に友達に連れて行かれたら、携帯持っていくの忘れちゃっても仕方ないよね、うん。

—安心—安し……ちよつと待てよ。

友達ってまさか菊池さん？

しよつちゆう、家に来てるし。この間だって。

まさか、でも

「ねえ、お兄ちゃん」

「ん？」

「と、友達って……菊池さん？」

「え？ 違うよ」

あつさり否定。その顔にウソはない、と思う。少し胸をなでおります。

お兄ちゃんが不思議そうな顔で「なんでいきなり菊池さんがでてきたの？」と訊いてくる。

「え、えつと。仲いいでしょ。よくお兄ちゃんの家に来てるみたいだし、だから」

「ああ、そっか」

「……奈津子なんか、お兄ちゃんと菊池さん付き合ってるみたいだ

って言ってた。お、お似合いだしね」

流れに任せて言ってしまった。これまで触れられなかった部分に、心臓がバクバクと音を立てる。お兄ちゃんはポカンとした顔で固まっている。

一秒が一分にも感じられる沈黙。やっぱり言わなきゃよかった、と後悔を始めたその時。ぷっとお兄ちゃんが吹き出した。

「え？」

「ははは、俺と菊池さんがお似合いってないよ、それは」

お兄ちゃんは楽しそうにゲラゲラ笑う。私は呆気にとられた。

「菊池さんとはなんでもないの？」

「当たり前じゃん。ただの友達だよ。やだなあ、亜美ちゃんまでそう思ってたの？」

「……ちよつとだけ」

「菊池さんは絶対にないから」

お兄ちゃんはきっぱりと断言する。そして。

「それに、俺、好きな子いるから」

いつもみたいに照れもせず、私を真っ直ぐに見てそう言った。

カーツと頬が、ううん、全身が熱くなってくのを感じる。

好きな子って誰？ と聞きたいのに言葉が上手く出てこない。

お兄ちゃんを見ていることさえ恥ずかしくなって、急に、この部屋には私たちがしゃべれないことを思い出して、頭の中はもうしっちゃんかめっちゃんかにパニック状態。

「亜美ちゃん」

「へあ」

不意に呼ばれて変な声がでる。お兄ちゃんは少しだけ笑って、私の体を引き寄せる。

手が私の頬に触れる。指が私の唇に触れる。目が私に訴えている。

拒むなら、今のうちだよって。

なにがどうなっただろうなっているのか分からない。

体は緊張で1ミリも動かない。

でも。

でも、私だっただけでずっとずっとしたかった。ずっとずっとしてほしかった。

お兄ちゃんに。

お兄ちゃんだから。

「……お兄ちゃん」

眩くなり、唇を塞がれた。

軽く重なって、すぐに離れて。そして、また塞がれる。

「んっ」

何度も何度も、角度や向きを変えて、ゆっくりと味わうようなキスにとろけそうになる。全身から力が抜け取られていくみたい。

その場に座り込んでしまわないように、お兄ちゃん
の背中をギュッと抱む。

もう全部、お兄ちゃんが好き。

カチコチと時計の針の音。それ以外に音はない。

静かで集中の出来る快適な部屋にいるのに出された問題が全く頭に入ってこない。

こっそり、こっそりと気付かれないように、お兄ちゃんを盗み見る。

教科書に目を落としているお兄ちゃんは全く気づかない。お兄ちゃんが気づいていない時なら、こうして見れるんだけど。

不意に私の視線に気付いたのか、お兄ちゃんが教科書から顔を上げる。思いつきり、目が合ってしまった。

「「!」「」

瞬間、私もお兄ちゃんも即座に目を逸らす。

だけど、心臓だけは正直で。目が合ったという行為に、ドキドキが隠せない。

キスを交わしてからの最初の授業は、始まりからずっと、こんな感じ。

顔を見るのが恥ずかしい。目を見るのが恥ずかしい。唇を見てたら、あの日のことを、思い出す

結局、あの日は、キス以上のことは何もなかったのだけれど。

あのあと、我に返ったお兄ちゃんは、倒れてしまいそうなくらい真っ赤になって「ごめん」と謝ってきて、私は私でもう一杯一杯で、キスの余韻も何もあつたもんじゃなかったし。

だから、今日会うまでこんなに恥ずかしくなるだなんて思ってもいなかったのだ。

一見、キスをしたことで大きな進展を見せたかのような私たちの関係は、実は少しも進展していない。それどころか、今まで出来ていたことすらまともにも出来なくなっている。この状況が長く続くのは考えものだ。

私としては、お兄ちゃんと普通に喋りたいし、見つめたい。どうにかしないと。気ばかりが焦る。

うーん、と悩んでいると「分かんないところでもある？」と、お兄ちゃんが訊いてくる。でも、うまいこと視線が合わないようにしている。

「え？ あ、えっと、多分分かってるんだけど、ちょっと今日は分かんないかも」

お兄ちゃんは支離滅裂な私の言葉の意味を理解してくれたのか、少しの間のあとに「……そっか」と頷いた。

「じゃあ、今日は勉強はやめておこう」

「う、うん」

とは言つもの、この静かな空間になにもしないで二人きりっていうのもちょっと困る。

なにか気が紛れるものでもないかと探していると、不意にお兄ちゃんが立ち上がった。

「ちょっと外の風あたりにいこうか？」

「え？」

「おじさんとおばさんが許してくれたらだけど」

「う、うん。聞いてくる」

私は階段を駆け下りて、両親がいるリビングに向かった。

亮くんが一緒なら安心、という理由でオツケーがでたので、私とお兄ちゃんは家を出て、ぷらぷらと外を歩いている。

さっきよりはマシになってきたけど、会話はやっぱりなかなか弾まない。

「あ

公園の入り口で思い出したようにお兄ちゃんが口を開く。

「ここ、亜美ちゃんに叩かれたところだね」

「うう、そんなこと思い出さなくていいよお」

「はは、ごめんごめん。ちょっと寄っていいこうか」

「うん」

どうせこの辺には散歩に適したところなんてないし、そう思ってお兄ちゃんの提案に頷く。

夜の公園で二人つきり。自惚れなんかじゃなければ、思いは一緒なんだと思う。私たちに足りないのは決定的な言葉だ。

そして、今、このシチュエーションはそれを相手に伝えるのにぴったり。

私はお兄ちゃんを横目で窺う。

お兄ちゃんは、涼やかな風に気持ちよさそうに目を細めて、ずいぶんトリラックスしているようだ。

うーん。お兄ちゃんからはないかな。

お兄ちゃんのリラックスっぷりにそう結論を出すのと同時に少しだけがっかりする。こんなこと考えてるのは私だけなのかなって。はぁ、と小さく溜息をつくとき、お兄ちゃんが「疲れちゃった？そろそろ帰ろうか」と、心配そうに顔を覗き込んでくる。

急にお兄ちゃんの顔がアップになって、ボンと音を立てるように顔が熱くなる。でも、その反面、今なら私からキスが出来ると思う自分がいて。

「亜美ちゃん？」

黙っている私にさらにお兄ちゃんが近づく。熱に浮かされるように私は、お兄ちゃんの唇をふさいでいた。

自分のものとは違う温もりを感じて、自分のした行動に心底驚く。お兄ちゃんにキスをしているのだという状況が、遅ればせながら脳に伝わってくる。

その事実をようやく頭の片隅で認識した途端に全身が沸騰したように熱を持つ。それでも、ぴたりと繋がる場所から想いの全てを送り込む。

お兄ちゃんが好き。お隣さんとして初めて会った時から、ずっとずっと好きだった……

時間にして数秒。だけど、私の気持ちを伝えるには十分な時間。触れたままだった場所が、呼吸を求めるように自然と離れた。肩で大きく息を吐く。

お兄ちゃんは頬を赤くして固まっている。そんな顔を見ると、段々と自分のしたことが恥ずかしくなってきた

「わ、私、帰るね。おやすみ、お兄ちゃん」

家に向かって全速力で走り出してしまった。
驚いたように私を呼ぶお兄ちゃんの声が聞こえたけど、私の足は止まらなかった。

「あら、おかえり。亮くんはどうしたの？」

家に飛び込むと、お母さんが不思議そうに声をかけてくる。散歩に出かける前に、きちんと家まで送り届けると約束していたお兄ちゃんの姿がないからだろう。

「げ、玄関で別れてきたの」

それだけを言うと、私はお母さんの返事も聞かず、階段を駆け上り、自分の部屋に飛び込む。

心臓がバクバクと酸素を求めて早鐘を打つ。立ってるのがきつくて、そのままドアに持たれかかる様にずるずると座り込む。

「……………なにやってんだろ」

お兄ちゃんに触れた部分を手でそっと撫でてみる。

すぐに思い出せる、お兄ちゃんの、唇の感触。

体温が急激に上がるのを感じる。走ってきたせいじゃない。どうしてあんなことしちゃったのか。まるで自分じゃなかったみたいだ。

「っっていうか、なんで逃げちゃったんだろ……………」

お兄ちゃんはその場で言葉を止めた。時折、風の音が聞こえるからまだ外にいるのだろう。

沈黙が続く。段々と焦ってくる。

何か言わないと。そう思って、私が口を開こうとしたその時

『好きだよ』

耳を疑うような一言がお兄ちゃんの口から発せられた。

「え？」

思わず聞き返してしまう。

だって、急に。今まで言ってくれなかったのに。
聞き間違いじゃないよね？

『俺、亜美ちゃんが好きだよ』

もう一度、告げられる言葉。視界が急にぼやける。
私、泣いてるんだ。嬉しくて涙が出るなんて初めてかもしれない。

『直接会って言いたいんだけど』

「え？」

『今、家の前なんだ。出てこられる？』

その言葉に私は部屋を飛び出していた。
階段を下りるのさえもどかしい。ドアを開けて、外へ。

「お兄ちゃん！」

私はお兄ちゃんに飛びつく。お兄ちゃんはしっかりと私を受け止めてくれた。

優しく背中に回される腕。全身にお兄ちゃんを感じる。

「好きだよ、亜美ちゃん」

耳元で囁かれる言葉。また涙が出そうになる。

でも、泣くのはまだ我慢。私もお兄ちゃんに伝えたい、この気持ち。

「……私も、お兄ちゃんが好き。ずっとずっと好きだったの、お兄ちゃんが好きだったの」

言えた、と思ったらもう我慢の限界。あっさりと私の目からは涙が零れて、お兄ちゃんがおろおろします。

「あ、亜美ちゃん……泣かないでよ」

「だって……嬉しいんだもん。お兄ちゃん、なかなか言って、くれないし」

「ごめんね」

「ううん」

「ほら、もう泣かないで、ね？」

滲んだ視界に、お兄ちゃんの瞳。その瞳が、少しずつ、閉じられていって。つられて私も瞳を閉じた。

そつと重なる唇。軽く触れるだけのキス。

「……いきなりは反則」

「じゃあ、言ったらいい？」

「……ううん」

「もう一回していい？」

こんな時だけ照れないんだもん、お兄ちゃんはずるい。頷くしかなくなるじゃん。

そして、また重なる唇。さっきのと違う、熱くて甘いキスは次第に激しくなっていく。

慣れてなくて少し息苦しいけど、お兄ちゃんの感情の昂ぶりがダイレクトに伝わってきて、素直に嬉しい。

甘い酸欠。

お兄ちゃんが大好き。

「やっぱりさ、お泊りに必要なのは、あれよね、あれ。で、あれして、さらに仲良くなるわけよ」

「はいはい」

「恋愛の達人の話は真面目に聞いておいたほうがいいよー。あとで後悔したくなきゃね」

「はいはいはいはい」

お兄ちゃんとのことを報告した時も相当うるさかったけど、今日はまだことさらうるさい奈津子。

自称・恋愛の達人は私がほとんど話を聞いていないのを承知で持論を熱く展開している。

言うんじゃなかった、なんてちよっぴり思ったりして。

今日はお兄ちゃんと恋人同士になって、はじめてお兄ちゃんの部屋に遊びに行く日。

泊まりに行くわけじゃないのに、なんでお泊りグッズの話が聞かなきゃいけないのか。それ以前に奈津子の話は『あれ』ばかりで意味がよく分からない。

休み時間になるたびにはじまる奈津子のどうでもいい忠告を右から左へ受け流して、いよいよ放課後になった。足取りも軽くお兄ちゃんの家に向かう。

電車の窓に映る自分の顔がにやけてるのに気づいて、少し恥ずか

しくなる。でも、嬉しいものは嬉しいし、楽しみなものは楽しみだ。

駅に着いて、スーパーに寄っていく。

この間、作ってあげられなかったオムライスを作ってあげるんだ。玉子に玉ねぎ、鶏肉、トマトピューレ。調味料は一杯あったから大丈夫かな。なんだかこうしてお兄ちゃんのために買い物をしていると、気分は通い妻って感じ。

そんなことを考えて、またにやけている自分に気づく。これじゃ変な人だ。

私はしまりのない頬をぺしっと叩いて引き締めてから、レジに並んだ。

買い物を買わせてスーパーを出ると、ポンと肩を叩かれた。

お兄ちゃんかと思いつつ振り返った私は「やっぱり亜美ちゃんだ」にこやかに立つ菊池さんに、お兄ちゃんに向けるとびっきりの笑顔を見せてしまった。

「そこ通ってたら亜美ちゃんに似た可愛い子が見えたから、ちょっと待ってみたの」

「そうなんですか」

どうして、私は菊池さんと一緒にお兄ちゃんのところへ向かっているんだろう。

「今日はいいい日」なんて、なぜか浮かれている菊池さんには悪いけど……少し気が重い。少しじゃなくて、かなり。

そんなこんなで、ご機嫌な菊池さんの話を聞きながら歩くこと数分、お兄ちゃんのアパートに到着する。

インターフォンを押すと、すぐにお兄ちゃんが出てきた。そして、

私の隣に立っている菊池さんを見て「げっ」と眉をひそめる。

「そんな露骨に嫌そうな顔しなくてもいいでしょ」

菊池さんはケラケラと笑いながら、お兄ちゃんの肩を叩く。

「別にそういうわけじゃないけど、なんか用？」

「片瀬君さ、この間の小谷教授の講義受けてたでしょ？」

「あー、うん」

「ノート貸して」

パンと両手を合わせて拝むポーズ。

お兄ちゃんはやれやれといった風に頭をかき「ちよっと待ってて」と部屋の奥に消える。

お兄ちゃんの姿がなくなるなり、菊池さんは申し訳なさそうに「ごめんね、亜美ちゃん。邪魔しちゃって」と頭を下げた。

「あ、いいえ、そんな全然」

「ふふ。でも、やっぱり付き合ってたのね、二人は。隠すことないのに」

「え？ 隠してたわけじゃ……えっと、つい最近なんです。そういう風になったの」

「本当に？」

「本当です」

「へー、意外……ってわけでもないか。片瀬君だしね」

菊池さんがそう言って笑ったのと同時にお兄ちゃんが戻ってきた。

「なにが意外なんだ？」

「ううん、別に。それより、ノート」

「ほれ」

「サンキュー。じゃ、私は若い二人の邪魔にならないように帰りますね」

菊池さんは受け取ったノートをひらひら振りながら階段を下りていく。

その姿を見送って「ごめんね、亜美ちゃん。待たせちゃって」とお兄ちゃんは私を部屋に招きいれてくれた。

「それ、なに？」

私の手にあるスーパーの袋を不思議そうに見ながら、お兄ちゃんが言う。

「前にオムライス作れなかったから、今日作るうかなって思って」

「え？ マジで？」

「マジです」

頷くと、お兄ちゃんの顔がパツと明るくなる。子供みたいでちょっと可愛い。

「じゃ、俺、米研ぐよ」

「大丈夫。お兄ちゃんはそっちで座って待ってて」

前は知らなかったからお願いしたけど、今日は違う。この日のためにお米の研ぎ方だって、ちゃんと練習してきたんだ。

お兄ちゃんをテーブルの前に座らせて、私は台所へ。

トン……トントン、ト、ン。

年季の入った主婦さんや料理人さんみたいに、リズムよくは鳴ら

ない包丁。家だと、もう少しまともなんだけど、背中に感じるお兄ちゃんの視線と、微かに聞こえるオムライスの歌？ に意識がいつて仕方がない。

「オム、オム、オム、オム、オムライスー」

こんなキャラだったかな、お兄ちゃんは。でも、歌っちゃうほど楽しみにしてくれてるのは正直に嬉しい。

お兄ちゃんの歌に合わせて包丁を動かしていると「……いたっ」少し指を切ってしまった。左手の人差し指からぷっくりと血が湧き上がってくる。

「どうしたの？」

私の声を聞きつけて傍にやってきたお兄ちゃんは、私の指を見るなり「ちょ、ちょっと待って、ばんそうこうばんそうこう」慌てて部屋の中を探し回る。でも、見つからなかったみたいだ。

「ごめん、なんか切らしてるみたいで」

「あ、大丈夫だよ。水につければいいから」

お兄ちゃんがすごく慌てるから言いそびれたけど、これくらい大した傷じゃない。

「いや、でもさ……手貸して」

なぜか頬を赤くしたお兄ちゃんが私の手を取る。

「お兄ちゃん？」

「ちゃ、ちゃんと消毒しておかないと」

その言葉とともに、パクリとくわえられた人差し指。

「お、お兄ちゃん!？」

「こ、これって現実？ 一昔前のマンガだよ、こんなの。それをお兄ちゃんがやってくれるなんて、でも、嫌じゃない。」

「……も、もう大丈夫かな」

突然の行動に私が目を白黒させている間に、お兄ちゃんはゆつくりと口を離す。自分からしておいて、お兄ちゃんの顔も真っ赤だ。

「ばんそうこ、ちゃんと買っておくから。ごめんね」

傷口は少し血が滲んでいる程度。もうさっきの消毒は必要ないけれど、もっとしてほしい。その思いが強くて。

恥ずかしくてたまらないのに「まだ血、出てるよ」私はそう言っていた。

微かに驚いたお兄ちゃんと目が合う。恥ずかしいのに、逸らせない。

徐々に近付いてく目、唇。気付いたら私の唇はお兄ちゃんの唇と重なっていた。

指より、やつぱり唇がいい。お兄ちゃんと恋人同士になってから幸せすぎて、死んじゃいそう。

あ、オムライスはとっても喜んでもらえた。

「……あやしい」

翌日、私が教室に入るなり奈津子が言う。そのまま教室の一角に連れて行かれての事情聴取。

「ぶっちゃけ、泊まったんでしょ？」

「泊まってないよ」

「うっそだー」

「嘘ついても何の得にもならないじゃん。まだ早すぎるよ、泊まつたりとかは」

「でも、昔からの知り合いでしょ。別に早くないんじゃない？ むしろ、遅いくらい」

「……私たちには私たちのペースがあるの」

「ふーん、つまんない」

本当につまらなさそうに奈津子は言った。

まったく、なにを期待してるんだか。やれやれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7471x/>

カテキョ

2012年1月11日19時53分発行